

中原朋哉（なかはら・ともや）（指揮者・文化政策学博士）

「シンフォニエッタ 静岡」芸術監督・指揮者。作曲を学んだ後、フランスで指揮をパスカル・ヴェロ、J.S. ベローの両氏に師事。1996年、フランス国立リヨン管を指揮してデビュー。その後ユベール・スダーン氏を中心に、多くの名指揮者のアシスタントを務める。2002年に帰国後、05年に「シンフォニエッタ 静岡」を創設。ラドミロー、長谷川勉作品の世界初演、デュティユー、フェルー、コネツソン作品等の日本初演を手掛ける。モーツァルトとフランス近代の音楽の演奏には定評がある。

静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科と京都橘大学大学院文化政策学研究科博士後期課程を修了。研究分野は芸術に対する公的支援制度、指定管理者制度。日本公共政策学会、日本評価学会、日本音楽学会会員。

創立20周年を迎えたシンフォニエッタ 静岡
中心的なレパートリーと、意欲的なプログラムで
2025/26 シーズン定期公演を予定

中原 朋哉（指揮者）

「これから先も、個性を失うことなく、
ひとつずつ演奏会を続けていきたいと…」

訊き手＝編集部

——「シンフォニエッタ 静岡」の創立20周年を迎えられた現在の感慨、想いをお話しいただけますでしょうか。また、20周年の中の一つのエポック（出来事、思い出）を教えてください。

中原 仲間に恵まれて、共に20周年を迎えられたことに感謝しています。また、これまでに演奏会にお越しくださった皆様、ご支援くださった皆様に感謝申し上げます。

振り返ると、どの演奏会も思い出深いものですが、自主公演では、オリヴィエ・シャルリエとのヴァイオリン協奏曲シリーズ。プーランクの『人の声』。同じコクトーの台本で描かれたリュフェの版画26点をスクリーンに映しながらのオペラは、大切なレパートリーのひとつとなりました。それから、86年間眠り続けていた『交響曲』（第2版）の世界初演など、陽の目を見ることのなかったラドミロー作品の紹介が挙げられるでしょうか。依頼公演では、ペートーヴェンの第7番やシューベルトの第5番、ブラームスの第2番（いずれも全楽章）を、30〜40人編成のオーケストラよりも少ない、山奥や海辺の小さな学校の子供たちが楽しそうに聴いてくれたことも忘れられ

ない思い出です。

——最悪の出来事として、2022年9月、依頼を受けて訪れた裾野市民文化センターでのスプリングライア事故です。楽器の被害だけでなく、骨折や救急搬送される怪我人が出て、多くの仲間が心的外傷も負っています。本当に信じがたいのですが、施設の設置者である裾野市が事故原因を認めず、未だに補償が進んでいません。

——創立20周年シリーズについて、その全体像についてお話しただけですでしょうか。

中原 大きなプロジェクトを進めていたのですが、スプリングライア事故の被害対応に多くの時間を割かれてしまい、白紙になってしまいました。このプロジェクトは問題が解決したところで改めて取り組みたいと考えています。定期公演も以前の回数に戻す予定でしたが、これも白紙になってしまいました。

——今年の3回の定期公演では、私達がプログラムの中心としてきた、モーツァルト、フランス近代の作品、一昨年から始めた20世紀の作曲家の個展で構成しています。年をまたいでしまいますが、来年1月にはパリ女性オーケストラと（旧）バーゼル

室内管弦楽団で初演されたフランスの作曲家による作品展、その先には20周年委嘱作品の初演も予定しています。

——創立20周年シリーズの②について、企画の意図、選曲の意図、特にラドミロー作品の選曲意図、各作品の魅力と聴きどころについてお話しただけですでしょうか。

中原 6月20日の第80回定期公演は、私達のレパートリーの中心としているフランス近代の作品の中から、シンフォニエッタ 静岡を象徴するラドミローの交響詩『ラ・ブリエール』とプーランク『シンフォニエッタ』を取り上げます。ショーン『愛と海の詩』は、昨年までカントループ『オーヴェルニュの歌』の全曲演奏を共にしてきた島木弥生さんと、フランスの管弦楽付き歌曲を演奏していこうということで入れました。

——ラドミローは、フランス・ナント在住中に遺族と知り合い、未出版の自筆譜や絶版となった作品を譲り受けました。いずれもブルターニュ地方の民謡が織り込まれた美しい作品です。フォーレ門下生の中ではラヴェルよりも人気があったという話もあるそうですが、音楽院の教員と



■シンフォニエッタ 静岡 2025/26 定期公演
第80回 創立20周年シリーズ② 愛と海の詩

♪6月20日(金) 19時

♪指揮：中原朋哉 メゾ・ソプラノ：鳥木弥生
♪曲目：ラドミロー／交響詩「ラ・プリエール」
ショーン／愛と海の詩
オネゲル／夏の牧歌
プーランク／シンフォニエッタ

第81回 創立20周年シリーズ③

オール・クセナキス・プログラム

♪10月10日(金) 19時

♪指揮：中原朋哉 メゾ・ソプラノ：鳥木弥生 他
♪曲目：クセナキス／アトレ、ネシマ、エペイ（以上、日本初演）、ワーグ

第82回 パリ女性オーケストラと

パーゼル室内管弦楽団へのオマージュ

♪2026年1月30日(金) 19時

♪指揮：中原朋哉
♪曲目：リヴィエ／交響曲第3番
シュミット／ジャンアナ（交響曲第1番）
ルーセル／シンフォニエッタ
オネゲル／交響曲第2番

♪会場：各日 三鷹市芸術文化センター 風のホール

♪シンフォニエッタ 静岡

TEL 090-9940-6995 / 054-204-7778

してナントに戻ると、控えめな性格もあり、次第に忘れられていったそうです。『ラ・プリエール』は、ナント近郊にある広大な湿地帯の名称です。この地を舞台にした、A・シャトー・ブリアンの小説（1923年アカデミー・フランセーズ小説大賞）を無声映画化し、それに付けられたのがラドミローの音楽です。今年は上演から100年にあたります。今回は、作曲家自身の手により、演奏会用に編み直されたものの初稿版をお楽しみいただきます。

私たちはプーランクが記したテンポや用語を見直し、プーランクの、またパリの、情熱的な感情、せつかな様子、夕暮れ時の愛の歌といったものをお聴きいただきたいと考えています。

——シリーズの③に、「オール・クセナキス・プログラム」を企画した意図、クセナキス音楽の本質、意味、魅力、また、一昨年のエドガー・ヴァレーズ、昨年のジョリヴェに続いて現代音楽を取り上げる意味、取り組む意欲をお話してください。

中原 ヴァレーズ、ジョリヴェときて、室内オーケストラでプログラムを組める作曲家を探していたらクセナキスに辿り着きました。現代の作曲家としては多作だと思いますが、意外と演奏されていないようですね。

今回取り上げる4作品のうち3作品が日本初演になるそうで、レンタル楽譜の日本初演加算料が想定外に多く、クラウドファンディングをしようかと検討しているところです。

美術では一人の作家の作品だけを鑑賞する機会がありますが、音楽で一人の作曲家の複数の作品を鑑賞する機会は少ないと思います。録音ではなく、演奏会でそんな機会があってもよいのではないかと考えました。また、オーケストラにとっても、ひとつの演奏会で様々な作曲家を取り上げるよりも、一人の作曲家に集中して取り組むことで得られるものが多いとあります。オーケストラとしてこの演奏会では一人の作曲家に集中して取り組む、それを鑑賞していただくことがこのシリーズの目的なので、特定の作曲家にこだわっていくのではなく、一人一人の作曲家とその作品をお客様と一緒にみていきたいと考えています。

——20周年を迎えた「シン

フォニエッタ 静岡」の課題、今後の方向、その未来像についてお話しただけですでしょうか。

中原 目下の課題はスプリングライナー事故の解決です。解決することで停止していた企画を進めることができると考えています。長期的には、日本の人口減少と、それに伴う国や自治体の財政、経済状況、オーケストラ界あるいはクラシック音楽界全体の課題を見渡すと、将来的にこの団体を次の世代に引き継いでいくのか、終わりを見据えた活動をしているのか、といった判断が必要になってくると考えています。

10周年を少し過ぎた頃、井上道義さんから「10年から20年が一番大変。そういうオケをいくつも見てきた。20年までたどり着ければ何とかなるよ」と言葉をかけてもらいました。創立から10年までは独自に招聘したソリストと共演することで成長し、次の10年はソリストやゲストの指揮者に頼ることなく、オーケストラそのものの性能を向上させる、シンフォニエッタ 静岡としての個性を認めてもらうことに注力しました。これから先も、個性を失うことなく、丁寧のひとつずつ演奏会を続けていきたいと考えています。

——ありがとうございます。